

【ピンチとチャンス】

the Pinch and a Chance

ピンチもいい思い出に

古田 亜希子

10年ぶりにスキーに行ったときのことで。10年ぶりとはいえ、小学生の時はらくらくと滑っていたので(ボーゲンですが)、何とかなるだろうと思って中級者コースのリフトに乗りました。しかし、コースの頂上に到着しリフトから降りた瞬間に転んでしまい、全く滑れなくなっていることに気づきました。スキーができないのに中級者コースの頂上に来てしまったので、かなりピンチだと思いました。仕方なく、スキー板をはずして友人に運んでいってもらい、自分は靴のまま下山しました。やっぱり、まあ大丈夫だろう、と思っている時ほどピンチに陥り易いのだな、とその時感じました。

その後は反省して、初級者コースで練習しました。小学生の時は滑っていたのに…というショックがあったためか、転んでもめげずに練習して、なんとか一日でボーゲンまで復活することができました。

また、タイ旅行に行った時のこと、三輪タクシーに乗って観光していたのですが、そのタクシーの運転手さんに騙されて宝石店に連れ込まれ、宝石を買うようにすごまれたことがありました。すごく怖かったのですが、「お金が無い」と言い張って走って逃げました。やはり異国の地ではもっと気を付けないといけない、と反省したと同時に、なんとかピンチを切り抜けられた、と自信も付きました。

まだまだ沢山ピンチなことはありましたが、振り返ってみて思うのは、最終的には悪い思い出にはならない、ということです。まさにピンチに陥っている時はかなり不安ですが、切り抜けているうちに自信がついたり、経験が増えたり、と無駄になっていることはありません。後から振り返ってみるといい思い出になる、と信じながら、今後のピンチも乗り切っていこうと思います。



忘れられないピンチ

古川 真理子

これまで、それほど重大なピンチやチャンスにまだ巡り逢った事がないのですが、たまにやってしまうことで一つピンチと言えることがあります。

子供のころから私は鍵っ子で、家に入るには当然鍵が要るわけですが、どういうわけか必ず定期的に鍵を忘れてしまうのです。

そういう時に限ってトイレに行きたくなくなったりします。私は九州の田舎出身なので、じゃぁコンビニでも行って…なんて事も出来ません。小学生にとっては大ピンチで、必死に知恵を絞りました。まずやることはどこか窓が開いていないか探すことです。もちろん入れるような窓は開いていないわけですが。

ある日、ふと2階のベランダの窓が開いていることに気がつきました。でも2階なんてどうやって登れるのか…考えました。

雨水を排水するパイプがうまい具合に壁に沿って伸びていて、何を思ったか猿のように登って見たところ、これまたうまい具合に1階部分の窓の雨戸がステップのような役割も果たしてくれ、見事2階に到着。無事家に入れました。

その後何度かこの手を使いましたが、私が成長するにつれパイプも耐えられなくなってきて、さらに親にも見つかりました。

最近マンションがオートロックなのに家の鍵を開けっ放しでマンションを出てしまい、右往左往した挙句、他の部屋にピンポンして開けてもらうということがありました。

あまりにも成長のない自分に呆れる毎日ですが、いい加減鍵の管理には気をつけたいと思う今日この頃です。



【ピンチとチャンス】

the Pinch and a Chance

相手もピンチ

福山 尚志

バドミントンの大会（ダブルス初心者クラス、一試合三ゲーム制）に出場した時のことでした。私は40歳代の男性とペアを組んで参加し、夏の暑い体育館の中で、一日中試合を繰り返し、体力の限界を何度も感じながらも、優勝することができました。

予選と決勝トーナメントで、ある学生ペアと2度対戦しました。親子ペアや子供ペアも参加している初心者クラスにあっては、毎日部活動で練習していると思われる彼らが強敵の部類であることは明らかでした。

彼らは私達と技量が拮抗しており、予選の対戦では、点を取ったり取られたり、緊迫した雰囲気です試合が進みました。残念ながら、私達は一ゲームを先取されました。二ゲーム目は一ゲーム目と同様のシーソーゲームながら、何とか私達が勝ちました。試合の勝敗が決まる三ゲーム目は、私達は疲れがひどく動きが鈍くなり、ミスを連発して序盤からリードを許してしまいました。まさにピンチの状態でした。「このままズルズル負ける…」と思っていると、次第に相手にもミスが目立ってきました。冷静になって観察すると、どうやら相手も疲れているようなのです。

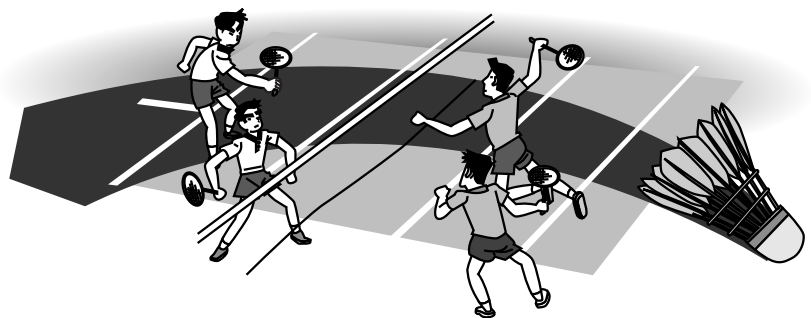
私は肩で息をするほど疲れていましたが、彼らの疲れている様子を見て、「私達が先に疲れたのだから、体力が回復するのは私達が先だろう。そのときに決着をつけよう。」という、暑さと疲労でおかしくなった思考により生み出した希望を抱きつつ、サーブの姿勢に入る動作などを多少ゆっくりしながら時間を稼いで、体力の回復を待ちました。その甲斐あってか（？）私達は勝つことができました。彼らにとっては、

私達に追い上げられているとき、さぞピンチを感じたことでしょう。ピンチを先に活かしたのは私達でした。

決勝トーナメントで再度彼らと対戦することとなったときは、また辛い体力勝負になるという予想からくる嫌な思いがよぎりながらも、相手の力量は分かっていることだし体力の配分に注意して粘れば勝てるでしょ？という心の余裕が生まれていました。

再戦では、予選の時と同様に一ゲーム目は先取されましたが、私は予選の時を思い出しながら平静を保っていました。二ゲーム目は体力温存のために無駄な動きをしないよう注意しながら私達が勝ち、三ゲーム目は相手の体力が先に尽きたところをチャンスとみて、一気に攻めて勝利を手にすることができました。単に試合に勝ったことだけでなく、予選のピンチで見出した教訓を早速活かして思い通りの軌跡で勝てたことを嬉しく思いました。

一般に、ピンチに陥ったとき、冷静になって周囲を見渡すと、このバドミントンの試合のように、ピンチなのは自分だけではない、ということがあります。このようなとき、全体としてはピンチながらも他者との相対的な優位を確保できれば、競争を有利に進めることができます。多くの者が消沈しがちなピンチの環境こそ、活力のある者にとってはチャンスと映ることでしょう。ピンチはチャンス、です。



モノは考え様

原 知佳代

一言でピンチと言っても、人それぞれピンチの感じ方は違うでしょう。私自身ピンチだらけの人生だったとも思えますし、ピンチという程でもないだろうと思えばそうなのかもしれません。

私にとって人生初のピンチと言えば中学受験です。12歳という幼いながらも「あたしの人生は終わった」と思ったのを覚えています。随分前の話になりますが、第一志望の学校に落ちてしまった時のこと、勉強不足だった...遊び過ぎた...と、とても後悔したことを覚えています。中高一貫校でしたのでそのまま高校にエスカレーターで進学してもよかったのですが、どうしてもあの悔しさのリベンジがしたいと思いました。あえて外部進学しなくても...と反対する両親に、行きたい高校を猛アピールしてお許しを頂きました。中学受験の失敗があったことで、高校受験に対する勉強意欲は人一倍ありました。その結果、志望校にも入学することができ、自分で思っていた以上の充実した学園生活を送ることができたのです。

次に印象に残っていることは、長年アルバイトしていた接客業での出来事です。こちら側のミスでお客様の気分を害してしまった時のことです。それだけ聞くとピンチだと思うでしょう。しかし、結果的にはそのお客様は笑顔で帰られたのです。普段直接お客様とお話しする機会がありませんので、その時に様々な思いを聞かせて頂きました。そして、改善点などこちら側から提案し話し合うことで、お客様との距離がとても近づきました。後日、その改善点などによって他のお客様にもより良いサービスを提供することができました。そして、以前よりもお客様の立場になって物事を考えることができるようになり、気がつく点が増えました。

その時その時ではピンチだと思っけていても、振り返ればピンチではなくチャンスだったのです。人生で必ずピンチは訪れますが、それは自分が成長できるチャンスであり、自分がピンチをチャンスと受け止められた時、目標に一步近づいている時なのだと思います。ピンチは視野を広げ、見方を変えて様々なことを考えることができるきっかけなのです。こう考えればピンチはピンチなのではなく、チャンスと言えるでしょう。

上述のような経験から、私はピンチだと思う状況に陥った時、常に自分を一回り以上成長させてくれるチャンスが来たのだと捉えるように心がけています。

一 病 息 災

～最近の体験から～

工藤 莞司

ある日曜日の早朝、突然腹痛が始まって止まらない。近くに住む長男家族に病院へ担ぎ込まれて、入院することになった。検査の結果、急激な大量飲酒による内臓炎と診断されて、その日から点滴のみで断食が始まった。確かに、年度末から、自分の退職や様々な会合、行事が重なって、飲みまくっていた。前夜も、送別会で泡盛のボトルを空けた。一週間後によろやく重湯が許され、徐々に普通食へと戻り二週間後に退院したが、アルコールは勿論、様々な食べ物の摂取までも制限された。

二度とあの痛みや入院療養はご免と、医者への言い付けを守らざるを得ない。酒飲みの小生としては、禁酒はつらい。それまでは、量は別として一年360日は飲んでた。しかし、眠れないことはないから未だ中毒ではないと別の意味では一安心。悪友は、医者は決して飲酒オーケーとは言わないから、再開は検査数値から自分で判断するのだと囁ける。誘惑に傾き掛けたこともあった。

やはり、神様は見えてくれた。我慢が功を奏した。一ヶ月検診、二ヶ月検診と、時が経つに連れて数値が改善して行き、四ヶ月後には制限付きではあるがアルコールも許された。そして、半年後の先月には、内臓炎は完治し、想定外のメタボ関連数値も、大半が正常値の範囲となり、かなりの減量も伴った。これまでドック受診の度に何とかしなくてはと少しは努力していたのだが、なかなか数値にまでは表れなかった。担当医も驚かれて、今後は年一回の検査で良いと言ってくれた。

一病息災というし、災い転じて福となすはこのことだろうか。しかし、油断は大敵。ピンチは何とか凌げたが、チャンスは確実に生かし、広げなくてはと思う、今日この頃である。

